**2016 年度　所員業績リスト**

■浅野倫子

＜論文＞（査読あり）

Yokosawa, K., Schloss, K. B., Asano, M., & Palmer, S. E. (2016). Ecological effects in cross-cultural differences between US and Japanese color preferences. Cognitive Science, 40, 1590-1616.

＜学会発表＞

Yokosawa, K., Takahashi, S., & Asano, M. (2016). Influence of visual complexity on synesthetic color choice for Japanese Kanji characters. 2016 Vision Sciences Society (VSS) Meeting, 33.4030, (2016 年 5 月, St. Pete Beach, USA) (査読あり).

Asano, M., Thierry, G., Kita, S., Kitajo, K., Okada, H., & Imai, M. (2016). Neurophysiological evidence for sound-symbolic sensitivity in six-month-old infants. XX Biennial International Conference on Infant Studies (ICIS 2016), 3-020-20, (2016 年 5 月, New Orleans, USA) (査読あり).

Asano, M. & Yokosawa, K. (2016). Determinants of synesthetic colors for different types of graphemes, Japanese characters and the English alphabet: a developmental model. Paper presented at Thematic Session TS27-15 "Grapheme-color synesthesia in East Asian languages" at the 31st International Congress on Psychology (ICP 2016), (2016 年 7 月，横浜) [Presenter, Co-organizer of the session] (査読あり).

Nagai, J., Yokosawa, K., & Asano, M. (2016). Synesthesia-like associations between graphemes and colors in Japanese non-synesthetic population. Paper presented at Thematic Session TS27-15 "Grapheme-color synesthesia in East Asian languages" at the 31st International Congress of Psychology (ICP 2016), (2016 年 7 月，横浜) (査読あり).

Imai, M., Saji, N., Asano, M., Ujihara, Y., Yasufuku, K., Ebe, M., & Ohba, M. (2016). How young children construct the lexicon as a connected system: The case of color names. Paper presented at Symposium "Beyond the language explosion: What gradual word learning tells us about conceptual development" at the 38th Annual Meeting of the Cognitive Science Society (CogSci 2016), (2016 年 8 月, Philadelphia, USA) (査読あり).

浅野倫子，高橋聡一郎，横澤一彦 (2016). 漢字の視覚的複雑性が色字共感覚の色に及ぼす影響. 日本基礎心理学会第 35 回大会, 2AM-16 (2016 年 10 月，東京) (査読なし).

Yokosawa, K., Tsushiro, T., Li, Q., & Asano, M. (2016). Effects of learning new sounds or meanings for Kanji characters on synesthetic grapheme-color association. 57th Annual Meeting of the Psychonomic Society, 4003, (2016 年 11 月, Boston, USA) (査読あり).

Nagai, J., Yokosawa, K., & Asano, M. (2016). Color associations for the English alphabet in

non-synesthetic Japanese people. 57th Annual Meeting of the Psychonomic Society, 4012, (2016 年 11 月, Boston, USA) (査読あり).

■江川隆男

＜論文＞（査読なし）

江川隆男「問いと倫理学」(『都倫研紀要』、第 54 集、東京都立高等学校公民科「倫理」「現代社会」研究会編、2016 年 7 月、pp.108-117)

江川隆男「破壊目的あるいは減算中継――能動的ニヒリズム宣言について」（アンドリュー・カルプ『ダーク・ドゥルーズ』所収、大山載吉訳、河出書房新社、2016 年 11 月、pp.195-213）

江川隆男「骨と血からなる〈非‐存在〉」(『立教映像身体学研究 5』所収、立教大学映像身体学科学生研究会編、2017 年 3 月、pp.108-117)

＜書評＞

江川隆男「骨と血からなる〈非‐存在〉――アントナン・アルトーにおける脱‐墓石化の身体（『アルトー後期集成　全三巻』（河出書房新社）完結によせて）」(『図書新聞』第 3260 号、図書新聞、2016 年 6 月 25 日、1 面)

＜評論文＞

江川隆男「過程と移行の錬金術的融合――エマーソン・レイク＆パーマー音楽演奏について」(『文藝別冊　エマーソン・レイク＆パーマー』所収、河出書房新社、2016 年 7 月、pp.66-71)

江川隆男「Syn-God-Zilla の迷宮」(『ユリイカ　『シン・ゴジラ』とはなにか』所収、青土社、2016 年 12 月臨時増刊号、pp.296-300)

＜講演＞

江川隆男「骨と血からなる〈非‐存在〉」(「アントナン・アルトー生誕 120 周年企画『抵抗と再生　A・アルトーの映像と身体』、立教大学現代心理学部主催、2016 年 6 月 26 日、於・立教大学新座キャンパス)

＜シンポジウム＞

江口正登（司会)、宇野邦一、江川隆男、堀切克洋、捩子ぴじん、「A・アルトーの《身体》をめぐって」(「アントナン・アルトー生誕 120 周年企画『抵抗と再生　A・アルトーの映像と身体』、立教大学現代心理学部主催、2016 年 6 月 26 日、於・立教大学新座キャンパス)

■江口正登

＜シンポジウム＞

シンポジウム　宇野邦一・江川隆男・堀切克洋・捩子ぴじん・江口正登（司会）、「抵抗と再生 ――A・アルトーの映像と身体――」、立教大学現代心理学部、2016 年 6 月 26 日、於・立教大学

■芳賀繁

＜論文＞

芳賀繁，中島和江．医療とレジリエンス・エンジニアリング，医療の質・安全学会誌，Vol.11, No.4，p.111, 2016.（2016 年 10 月）（査読無）

芳賀繁．エラーマネジメントの過去と未来：ヒューマンエラーから組織事故，そしてレジリエンス・エンジニアリングへ，電気評論，2016 年 5 月号，pp.7-10，2016.（2016 年 5 月）（査読無）

＜学会等での発表＞

Shigeru Haga, Kanae Fukuzawa, Eri Kido, Yoshinori Sudo, and Azuri Yoshida, Effects on Auditory Attention and Walking While Texting with a Smartphone and Walking on Stairs C. Stephanidis (Ed.): HCII 2016 Posters, Part I, CCIS 617, pp. 186–191, 2016. DOI: 10.1007/978-3-319-40548-3_31（査読有）

Haga, S. Psychology and Safety Practice: How can we psychologists contribute to safety?, Invited address, 31st International Congress of Psychology, July 24-29, 2016, Yokohama, Japan.（2016 年 7 月）（招待講演）（査読無）

重森雅嘉，大嶋玲未，芳賀繁．最前線作業現場の自主的安全リーダー:高速道路メンテナンスにおける SAFETY-II，産業・組織心理学会第 32 回大会発表論文集，pp.197-200, 2016.（2016 年 9 月）（査読無）

大谷華，芳賀繁．雇用形態により仕事の誇りの効果は異なるか ―拡張版職業的自尊心－安全行動意思モデルと従業員特性―，産業・組織心理学会第 32 回大会発表論文集，pp.235-236, 2016.（2016 年 9 月）（査読無）

佐藤秀香，芳賀繁．駅構内における歩きスマホ行動要因モデルの検討および行動抑制を目的とした介入の効果検証, 産業・組織心理学会第 32 回大会発表論文集, pp.261-262, 2016.（2016 年 9 月）（査読無）

■林もも子

＜寄稿＞（学会誌以外）

林もも子（2016）思春期とアタッチメント，『教育と医学』64 巻 11 号, 38-45, 慶應義塾大学出版会

＜著書＞

林もも子（2017）精神分析再考－アタッチメント理論とクライエント中心療法の経験から－　みすず書房（単著）

■日高聡太

＜論文＞（査読有）

Ide, M., Hidaka, S., Ikeda, H., and Wada, M. (2016). Neural mechanisms underlying touch-induced visual perceptual suppression: An fMRI study. Scientific Reports, 6, 37301.

Sato, T., Mizoguchi, H., Arakawa, A., Hidaka, S., Takasuna, M., and Nishikawa, Y. (2016). History of "History of Psychology" in Japan. Japanese Psychological Research, 58, 110-128.

池田華子，田中智明，日高聡太，石山智弘，宮崎弦太 (2016). 動画像の解像度の違いが感性的印象へ及ぼす影響—撮影対象と提示方法に着目して—. 認知科学, 23(2), 101-117.

＜学会発表＞（国際学会）

Teramoto, W., Higuchi, S., Hidaka, S., and Sugita, Y. Sound-contingent visual motion perception: Evidence from functional neuroimaging. Society for Neuroscience 2016 (November, 15, 2016, San Diego)

Hidaka, S., and Ide, M. Crossmodal perceptual masking effect. 31th International Conference of Psychology (July, 27, 2016, Yokohama)

＜学会発表＞（国内学会）

矢口彩子，日高聡太．自閉症スペクトラム傾向とダブルフラッシュ錯覚の生起様式との関係性．第八回多感覚研究会 (2016 年 11 月 20 日，早稲田大学戸山キャンパス)

日高聡太．多感覚相互作用の諸相—学習・知覚の抑制・個人差．日本基礎心理学会第 35 回大会 (2016 年 10 月 30 日，東京女子大学)

日高聡太，井手正和，池田華子，和田真．触覚誘導性視知覚抑制効果に関連する脳内神経活動変化の検討．日本基礎心理学会第 35 回大会 (2016 年 10 月 30 日，東京女子大学)

矢口彩子，日高聡太．自閉症スペクトラム傾向と視・聴・触覚の処理様式との関係性に関する検討．日本基礎心理学会第 35 回大会 (2016 年 10 月 30 日，東京女子大学)

日高聡太．基礎心理学から見た個人差：自閉症傾向と感覚情報処理との関係性．第 12 回東

北心理学会・北海道心理学会合同大会 (2016 年 10 月 1 日，コラッセふくしま)

矢口彩子，日高聡太．自閉症スペクトラム傾向と視聴覚錯覚の生起様式との関係性．日本認知心理学会第 14 回大会 (2016 年 6 月 18 日，広島大学東広島キャンパス)

日高聡太．異種感覚入力によって生じる視知覚への抑制効果．生理学研究所研究会「視知覚の総合的理解を目指して―生理学、心理物理学、計算論」 (2016 年 6 月 9 日，自然科学研究機構岡崎コンファレンスセンター)

■日高優

＜図書・共編著＞

日高優編（2016）『映像と文化』、京都造形芸術大学・東北芸術工業大学　出版局　藝術学舎、全 228 頁、2016 年 5 月。担当箇所、日高優「序」3-4 頁、日高優「映像文化とは何か」11-22 頁、日高優「写真の誕生――映像時代の幕開け」23-36 頁、日高優「映像の知覚経験の拡大、映像の冒険」37-50 頁、日高優「映像と記憶――〈広がり〉と〈深さ〉からの考察」79-92 頁、日高優「多様化する映像と映像経験――多数化するフレームの観点から」135-150 頁、日高優「コラム　書物案内」222-223 頁、日高優「おわりに」220-221 頁。

田中正之編（2017）『西洋近代の都市と芸術 7　ニューヨーク――錯乱する都市の夢と現実』竹林舎、全 504 頁、2017 年 1 月。担当箇所、日高優「知覚の探求者、写真家アルフレッド・スティーグリッツの誕生」218-238 頁。

■石山智弘

＜論文＞（査読あり）

池田華子，田中智明，日高聡太，石山智弘，宮崎弦太（2016）．動画像の解像度の違いが感性的印象へ及ぼす影響―撮影対象と提示方法に着目して―．認知科学．23 巻 2 号，pp101-117.

■嘉瀬貴祥

＜論文＞

Bannai, K., Kase, T., Endo, S., & Oishi, K. (2016). Relationships among performance anxiety, Agari experience, and depressive tendencies in Japanese music majors. *Medical Problems of Performing Artists*, **31**, 205-210.（査読有）

嘉瀬貴祥, 飯村周平, 坂内くらら, 大石和男（2016）. 青年・成人用ライフスキル尺度（LSSAA）

作成　心理学研究, **87**, 546-555.（査読有）

嘉瀬貴祥（2016）．コミュニティ福祉学部生を対象とした質問紙調査データの一般化可能性について—GHQ 精神健康調査票への回答傾向からの検討と考察—　まなびあい, **9**, 67-74.（査読無）

Kase, T., Endo, S., & Oishi, K. (2016). Process linking social support to mental health through a sense of coherence in Japanese university students. *Mental Health & Prevention*, **4**, 124-129.（査読有）

嘉瀬貴祥，坂内くらら，大石和男（2016）．日本人成人のライフスキルを構成する行動および思考—計量テキスト分析による探索的検討—　社会心理学研究, **32**, 60-67.（査読有）

嘉瀬貴祥，上野雄己，大石和男（2016）．高い Sense of Coherence を持つ者のライフスキルの特徴と構造に関する探索的検討　パーソナリティ研究, **25**, 93-96.（査読有）

＜学会発表＞

嘉瀬貴祥，大石和男（2016）．大学生のライフスキルと Sense of Coherence がコンピテンスに与える効果の検討　一般社団法人日本学校保健学会第 63 回学術大会（2016 年 11 月 20 日，筑波大学筑波キャンパス）（査読有、口頭発表）

嘉瀬貴祥，大石和男（2016）．攻撃性と対人スキルの関連—攻撃性と対人スキルの構成因子に注目して—　日本社会心理学会第 57 回大会（2016 年 9 月 18 日，関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス）（査読有、ポスター発表）

嘉瀬貴祥，上野雄己，大石和男（2016）．攻撃性に Sense of Coherence とライフスキルが与える効果の検討　日本パーソナリティ心理学会第 25 回大会（2016 年 9 月 14 日，関西大学千里山キャンパス）（査読有、ポスター発表）

Kase, T. (2016). Characteristics of life skills in highly sensitive persons: From the viewpoint of life skills education for mental health. In A. Takahashi, Y. Ueno, S. Iimura, T. Kase, R. Amemiya, & M. Hirano, Highly sensitive people in Japan: From measurement to psychological approaches. 31st International Congress of Psychology（2016 年 7 月 24 日，パシフィコ横浜）（査読有、口頭発表）

＜講演＞

森本茂，嘉瀬貴祥，小笠原準悦，小澤智子（2016）．心身ともに健康な子どもをめざして—かかわり合いを大切にし、めあてを持って自らを高めようとする子の育成—　大和市立大野原小学校研究発表会（2016 年 11 月 11 日，神奈川県大和市立大野原小学校）

■加藤千恵

＜解説文＞

加藤千恵「陰陽と五行―世界を理解するための枠組み」（『世界文化シリーズ⑥　中国文化55のキーワード』ミネルヴァ書房，2016年4月，156-159頁）

加藤千恵「楽園と庭園―桃源郷と壺中天」（『世界文化シリーズ⑥　中国文化55のキーワード』ミネルヴァ書房，2016年4月，32-35頁）

＜学会発表＞

加藤千恵「鉛汞小考」（「日本道教学会第六十七回大会」2016年11月12日，京都大学）

＜解題＞

加藤千恵「前田英樹『剣の法』」（『立教映像身体学研究』第5号2017年3月10日, 71-74頁）

■香山リカ

＜著作＞

香山リカ (2016). ノンママという生き方　子のない女はダメですか？，幻冬舎，全202頁：テレビドラマ『ノンママ白書』連動企画，東海テレビ制作，2016.8.13～9.24放送

香山リカ (2016). 50オトコはなぜ劣化したのか，小学館，全221頁

津田大介（監修），いとうせいこう（著），岩井俊二（著），香山リカ（著）&他26名(2016). はじめて投票するあなたへ、どうしても伝えておきたいことがあります。，ブルーシープ，全196頁

香山リカ (2016). リベラルですが、何か？，イースト・プレス，全240頁

＜著書以外の著作＞

島田洋七（著），ねじめ正一（著），香山リカ（著）&13名(2016). 私と介護，新日本出版社，全128頁

池上彰（著），香山リカ（著）&12名(2016). 随縁つらつら対談，本願寺出版社，256頁

池内了（著），藤原辰史（著），香山リカ（著）&他2名(2016). 現代思想 2016年11月号特集=大学のリアル ―人文学と軍産学共同のゆくえ，青土社，全229頁

加藤寛（著），最相葉月（著），香山リカ（著）&他5名(2016). 現代思想 2016年4月臨時増刊号 総特集=imago〈こころ〉は復興したのか，青土社，全221頁

角田光代（著），西加奈子（著），香山リカ（著）&他15名(2016). 現代思想 2016年3月臨時増刊号 総特集◎imago 猫！，青土社，全206頁

蒼井ブルー（著），宇野常寛（著），香山リカ（著）&他 26 名(2016). マンガがあるじゃないか，河出書房新社，全208頁

＜学会発表＞

香山リカ.「すがること」と「だまされること」の精神病理，日本精神病理学会第 39 回大会，（2016 年 10 月 7 日，アクトシティ浜松コングレスセンター）

香山リカ．対談「マスメディアと精神科医」，第 16 回日本外来精神医療学会総会，（2016 年 7 月 10 日，横浜市開港記念会館）

香山リカ．なぜ「理解」しないのか　なぜ「負け」を認めないのか，日本生物地理学会第 71 回年次大会，（2016 年 4 月 16 日，東京大学農学部弥生講堂）

＜論文＞

香山リカ (2016)．軍学共同研究“解禁”の動きと精神医療，精神医療 84，74-82

香山リカ (2016)．SNS 疲れ，臨床精神医学，vol.45(10)，1237-1241

香山リカ (2016)．ジェンダーとスペクトラム，精神医学の基盤 3，学樹書院，100-101

■松永美希

＜論文＞（査読有）

松永美希，中村菜々子，三浦正江，原田ゆきの（印刷中）新任教師のリアリティ・ショック要因尺度の作成　心理学研究　88(4) 掲載確定

＜書籍＞

松永美希　第 8 章他者と交わる心(p.87-100)，第 11 章臨床における心の捉え方(p.129-144)　鈴木伸一，伊藤大輔，尾形明子，国里愛彦，小関俊祐，中村菜々子，松永美希（2017）．対人援助と心のケアに活かす心理学　有斐閣

＜論文＞（査読無）

松永美希（2017）．新任教師のストレス　教育と医学　65, 316-323.

＜学会発表＞

戸澤杏奈，松永美希（2016）．仕事における心理的柔軟性が心理的ストレス反応およびパフォーマンスに与える影響　日本認知・行動療法学会第 42 回大会（2016 年 10 月 9 日，徳島）

■中村秀之

＜図書・単著＞

中村秀之（2017）『特攻隊映画の系譜学――敗戦日本の哀悼劇』、岩波書店、全 312 頁、2017

年 3 月

＜図書・共編著＞

井川充雄・石川巧・中村秀之編（2017）『〈ヤミ市〉文化論』、ひつじ書房、全 321 頁、2017 年 2 月。担当箇所、中村秀之「敗戦後日本のヘテロトピア――映画の中のヤミ市をめぐって」、108-133 頁

＜書評＞

中村秀之（2017）「〈無国籍者〉の映画論――御園生涼子『映画の声――戦後日本映画と私たち』書評」、『表象』11 号、301-304 頁、2017 年 3 月（依頼）

中村秀之（2017）「レヴュー　アンドレ・バザン著、堀潤之訳『オーソン・ウェルズ』インスクリプト、2015 年」、『映像学』97 号、96-100 頁、2017 年 1 月（依頼、査読あり）

■中山真里子

＜論文＞（査読あり）

Yoshihara, M., Nakayama, M., Verdonschot, R. G., & Hino, Y. (in press). The phonological unit of Japanese Kanji compounds: a masked priming investigation. *Journal of Experimental Psychology: Human Performance and Perception.*

Nakayama, M., Lupker, S. J., & Itaguchi, Y. (in press). An examination of significant L2-L1 noncognate translation priming in the lexical decision task: Insights from distributional and frequency-based analysis. *Bilingualism: Language and Cognition.*

Perea, M., Nakayama, M., & Lupker, S. J. (in press). Alternating-script priming in Japanese: Are Katakana and Hiragana characters interchangeable? *Journal of Experimental Psychology: Learning, Memory, and Cognition.*

Nakayama, M., Ida, K., & Lupker, S. J. (in press). Cross-script L2-L1 noncognate translation priming in lexical decision depends on L2 proficiency: Evidence from Japanese–English bilinguals. *Bilingualism: Language and Cognition, 19,* 1001-1022.

＜学会等での発表＞

Nakayama, M., Lupker, S. J., & Hino, Y. (2016, November). Is there lexical competition in the recognition of L2 words for different-script bilinguals? A masked priming investigation with Japanese-English bilinguals. Presented at the 57th annual meeting of the Psychonomic Society, Boston, MA, U. S. A. (査読あり)

Yoshihara, M., Nakayama, M., Verdonschot, R. G., & Hino, Y. (2016, November). The

phonological unit of Japanese Kanji words. Presented at the 57th annual meeting of the Psychonomic Society, Boston, MA, U. S. A. (査読あり)

Ida, K., Nakayama, M., & Hino, Y. Nature of bilinguals' word recognition for high- and low-proficient bilinguals. 第 19 回認知神経心理学研究会, 広島, 2016 年 8 月.

■小口孝司

＜論文＞（査読あり）

Kawakubo, A., Kasuga, H., & Oguchi, T. (2017). Effects of a short-stay vacation on the mental health of Japanese employees. *Asia Pacific Journal of Tourism Research*, 22, 565-578.

川久保惇，林田明子，小口孝司 (2016). ネイルケアが女性の心理に及ぼす影響 ビューティビジネスレビュー, 14, 13-22.

花井友美，小口孝司 (2017). 被自己開示者の精神的負担感 立教大学心理学研究, 59, 41 - 56.

＜学会発表＞

Pearce, P., Oguchi, T., Wu, M., & Mohammadi, Z. (2016). International studies in savoring; Coding recollections of intensely remembered tourism experiences. *6th International Tourism Studies Association Biennial Conference*.（査読あり）

Kawakubo, A., & Oguchi, T. (2016). Effects of travel and its recollections on subjective happiness. *Proceedings of 22nd Asia Pacific Tourism Association Annual Conference*, 106-114. (Nominated Best Paper Award) （査読あり）

Miyakawa, E., Kawakubo, A., & Oguchi, T. (2016). Effects of travel experiences on job performance of employees in a Japanese company. *Proceedings of 22nd Asia Pacific Tourism Association Annual Conference*, 1115-123.（査読あり）

Hanai, T., Kawakubo, A., & Oguchi, T. (2016). Does talking on social networking services about vacation experiences contribute to subjective well-being? *Proceedings of 22nd Asia Pacific Tourism Association Annual Conference*, 366-372.（査読あり）

Yamaguchi, K., & Oguchi, T. (2016). Effects of management commitment and job satisfaction on employees' depression and interpersonal service. *Proceedings of 22nd Asia Pacific Tourism Association Annual Conference*, 366-372.（査読あり）

Kawakubo, A., Kasahara, Y. & Oguchi, T. (2016). The effects of school excursions on subsequent travel experience and generic skills. *6th International Tourism Studies Association Biennial Congress*.（査読あり）

Miyakawa, E., Kawakubo, A., & Oguchi, T. (2016). Effects of travel experiences on job performance of employees in a Japanese company. *6th International Tourism Studies Association Biennial Congress*.（査読あり）

Hanai, T., & Oguchi, T. (2016). Where do Stressed People Prefer Travelling to: Rural Resorts or Urban Resorts? *6th International Tourism Studies Association Biennial Congress*.（査読あり）

Kawakubo, A., & Oguchi, T. (2016). Psychological effect of nail-care on mental state of Japanese female. *31st International Congress of Psychology.*（査読あり）

Kawakubo, A., Miyakawa, E., & Oguchi, T. (2016). Effects of depression and hardiness on the job performance rating of Japanese employees. International Association for Cross-Cultural Psychology. *23rd International Congress*.（査読あり）

Kawakubo, A., & Oguchi, T. (2016). Examining the Effects of Response Styles on Depression Among Japanese Adults, *The 17th Annual Meeting of the Society for Personality and Social Psychology*.（査読あり）

宮川えりか, 小口孝司 (2016). 旅を楽しめる人は幸せか？―旅行の享受傾向が主観的幸福感に及ぼす影響　第 31 回観光研究学会

宮川えりか，川久保惇，小口孝司 (2016). 大学時代の旅行経験が人事評価に及ぼす影響 第 32 回産業・組織心理学会大会【優秀学会発表賞】

＜その他＞

小口孝司 (2017). 空気を読んで失敗する人、空気を読まずに成功する人 PRESIDENT, 964, 125.

小口孝司 (2016). 権力は、「リーダー」よりも「ドン」が握る　PRESIDENT, 963, 134.

大江靖雄，小口孝司，海津ゆりえ，寺崎竜雄，久保田美穂子(2016). アジアにおける観光研究の動向　観光文化, 228, 2-11.

■大石幸二

＜研究論文＞（査読あり）

渡辺杏里，大石幸二，林安紀子（2016）．聴覚障害学生の心身の健康に及ぼすソーシャル・サポートの影響―高等教育機関における修学支援状況との関連―　東京学芸大学教育実践研究支援センター紀要，**12**，119-126.

大石幸二（2016）．行動コンサルテーションに関するわが国の研究動向―学校における発達障害児の支援に関する研究と実践―　特殊教育学研究，**54**，47-56.

大石幸二，澤邊嵩介（2016）．動的学校画（KSD）における有資格心理士による活動の知覚　人間関係学研究，**21**，17-24.

渡邉孝継，須藤邦彦，大石幸二（2016）．自閉症スペクトラム障害児における表情を含む複数の刺激の弁別訓練―条件性弁別の枠組みに基づくポーカーゲームを通して―　人間関係学研究，**21**，3-15.

Oishi, K. (2017). Differentiation of preference using response-reinforcement delay in a child with

autism: A case report and review of the literature. Acta Psychopathologica, 3(2), article # 6, Pp. 1-5.（Published online 2017 March 31）

＜研究論文＞（査読なし）

大石幸二（2017）．子どもの幸せのために私たちがすること（Special needs education for wellbeing of all children），星美学園短期大学日伊総合研究所報，**13**，24-27.

＜学会発表＞

竹森亜美，中内麻美，大石幸二（2016）．知的障害児における時間的見積もり獲得のためのエラー分析．日本特殊教育学会第 54 回大会（開催校：新潟大学）

中内麻美，竹森亜美，大石幸二（2016）．発達障害児の主体的な活動参加の支援に関する予備的研究―小集団場面における自発的な発話行動を促進する他者の発言に関する条件設定の効果―．日本特殊教育学会第 54 回大会（開催校：新潟大学）

脇貴典，太田研，榎本拓哉，大石幸二，春木美紀（2016）．特別支援学校教員の省察的実践を支える職能発達プログラム（自主シンポ）．日本特殊教育学会第 54 回大会（開催校：新潟大学）

Waki,T., Suto,K., Matsuoka,K., & Oishi,K.(2016). Training Teachers in School Consultation. *2016 International Conference on Education Psychology and Society*: Tokyo; Japan

＜寄稿論文＞（学会誌以外）

大石幸二（2017）. 今月の本棚―個のダイナミクス（山本尚樹著）―. 児童心理, **1037**, p.126.

＜取材・報道・記事＞

①ひきこもりに対する支援．解説．NHK 山口放送局（2016 年 4 月 22 日）.

②障がい児の支援―大人になるまで―．新聞記事．毎日新聞（2016 年 6 月 28 日）.

③図書紹介：子ども参加型チーム援助．特別支援教育研究．東洋館出版社（2017 年 1 月 1 日発行）

■佐藤一彦

＜映像作品＞

佐藤一彦（2016）「4K でよみがえる浮世絵・2・歌川広重『名所江戸百景』～江戸の豊穣な色世界をめぐる～」（4K/HDR による映像作品）

プロデュース・構成・演出　佐藤一彦

■塚本伸一

＜論文＞

塚本伸一（2016）．教師の指導態度、学級集団構造、学級雰囲気が児童の向社会的行動に及ぼす影響．キリスト教教育研究，34，21-36.（査読あり）

＜書籍＞

塚本伸一（2016）．社会・集団の心理．長田久雄（編）『看護学生のための心理学』医学書院，Pp104-120.

＜学会発表＞

野田健一，塚本伸一（2016）．自己決定をサポートする環境が内面化と調整スタイルに及ぼす影響．日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集，784.（2016 年 10 月 8 日，香川大学）

菅原宏明，塚本伸一（2016）．自己決定理論に基づく調整スタイルと職業レディネスとの関連の検討．日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集，756.（2016 年 10 月 8 日，香川大学）

■都築誉史

＜著書＞

都築誉史（印刷中）．ICT・情報行動心理学への招待（第 1 章）　都築誉史（編）ICT・情報行動心理学 (pp. 1-20) 北大路書房（全 170 頁）

都築誉史（印刷中）．集団による課題遂行とコミュニケーション（第 5 章）　都築誉史（編）ICT・情報行動心理学 (pp. 107-127) 北大路書房（全 170 頁）

＜学会発表＞（国際学会）（査読あり）

Kawai, H., Tsuzuki, T., & Chiba, I. (2016). The impact of simultaneous presentation of plural prisoner's dilemma games on the cooperation rate and its prediction. *The 31st International Congress of Psychology (ICP2016, Yokohama, Japan)*, OR25-16-5.（2016 年 7 月）

Kikuchi, M., & Tsuzuki, T. (2016). Influences of social distance and accountability in multi-alternative decision making. *The 31st International Congress of Psychology (ICP2016, Yokohama, Japan)*, PS28A-12-91.（2016 年 7 月）

Seshita, U., & Tsuzuki, T. (2016). An examination of the correlation between sense of humor and fantasy proneness. *Abstract of the 37th Annual Conference of Society for Judgment and Decision Making (Boston, USA)*, No.2-139.（2016 年 11 月）

Soma, M., Tsuzuki, T., & Chiba, I. (2016). Phantom effect in dynamical models of multialternative

choice. *The 31st International Congress of Psychology (ICP2016, Yokohama, Japan)*, PS28A-12-87.（2016 年 7 月）

Tsuzuki, T., Takeda, Y., & Chiba, I. (2016). Effortful processing reduces the attraction effect in multi-alternative decision making: An electrophysiological study using a task-irrelevant probe technique. *Abstracts of the Psychonomic Society (The 57th Annual Meeting, Boston, USA)*, Vol.21, p.116, No.1206.（2016 年 11 月）

＜学会発表＞（国内学会）

川合裕基，都築誉史，千葉元気 (2016). 囚人のジレンマ課題の利得表を同時に複数呈示することによる文脈効果が協力率およびその推定値に及ぼす影響　*Technical Report on Attention and Cognition*, No.11.

■山田哲子

＜受賞＞

2016 年度日本質的心理学会論文賞（優秀着眼論文賞）

山田哲子（2015）．知的障がいのある子どもを緊急に親元から離すプロセスとは - 望んでいた親の施設利用に焦点を当てて - 日本質的心理学研究，14，166 - 181

＜学会発表＞

大西真美，曽山いづみ，山田哲子，渡辺美穂，福丸由佳，大瀧玲子，村田千晃，本田麻希子，小田切紀子，青木聡，藤田博康（2016）．離婚を経験した家族への FAIT プログラムの試行実践（6）―子ども向け FAIT プログラムの意義と課題―．日本家族心理学会第 34 回大会

■山本尚樹

＜論文＞（招待あり）

山本尚樹（2016）．運動発達の基礎研究は発達支援に対してどのような意義を持つか？，臨床発達心理実践研究 11（1），pp.32-36.

＜単著＞

山本尚樹（2016）．個のダイナミクス：運動発達研究の源流と展開，金子書房，全 196 頁.

＜学会発表＞（査読なし）

山本尚樹（2016）．四つ這いに至る動作群の発達，日本発達心理学会第 28 回大会論文集，

P2_62.

■安田みどり

＜論文＞（査読なし）

安田みどり (2017). コミュニティ心理学における予防に関する教育の試み　コミュニティ心理学研究，20(2)，164-173.

＜学会発表＞

安田みどり (2016). 大学生における学生相談に対する援助要請―エンパワメントにつながる介入の検討―　日本コミュニティ心理学会第 19 回大会

＜著書＞

安田みどり (2017). 看護師の援助要請　水野治久監修　永井智，本田真大，飯田敏晴，木村真人編　援助要請と被援助志向性の心理学　金子書房　60-69.

■中内麻美

＜研究論文＞（査読あり）

中内麻美，竹森亜美，福田惇総，大石幸二．臨床発達心理実践研究（審査中）
発達障害児に対する他者の状況をふまえた意思決定の支援―小集団活動における「話し合い表」を用いた指導の般化効果の検証―.

＜学会発表＞

竹森亜美，中内麻美，大石幸二（2016）．知的障害児における時間的見積もり獲得のためのエラー分析．日本特殊教育学会第 54 回大会（開催校：新潟大学）

中内麻美，竹森亜美，大石幸二（2016）．発達障害児の主体的な活動参加の支援に関する予備的研究―小集団場面における自発的な発話行動を促進する他者の発言に関する条件設定の効果―．日本特殊教育学会第 54 回大会（開催校：新潟大学）

＜研究助成＞

平成 28 年度 笹川科学研究助成・実践研究部門（公益財団法人日本科学協会）
研究課題「学公連携による発達障害児の社会的自立の支援に関する実践研究―大学‐家庭・地域をつなぐ参加型アクション・リサーチ―」
研究番号 28‐805　　研究代表者：中内麻美　研究協力者：渡邉孝継，竹森亜美
助成額：370,000 円　研究助成期間：2016 年 4 月～2017 年 2 月

■竹森亜美

＜研究論文＞（査読あり）

中内麻美，竹森亜美，福田惇総，大石幸二．臨床発達心理実践研究（審査中）
発達障害児に対する他者の状況をふまえた意思決定の支援―小集団活動における「話し合い表」を用いた指導の般化効果の検証―.

＜学会発表＞

竹森亜美，中内麻美，大石幸二（2016）．知的障害児における時間的見積もり獲得のためのエラー分析．日本特殊教育学会第 54 回大会（開催校：新潟大学）

中内麻美，竹森亜美，大石幸二（2016）．発達障害児の主体的な活動参加の支援に関する予備的研究―小集団場面における自発的な発話行動を促進する他者の発言に関する条件設定の効果―．日本特殊教育学会第 54 回大会（開催校：新潟大学）

＜研究助成＞

平成 28 年度 笹川科学研究助成・実践研究部門（公益財団法人日本科学協会）
研究課題「学公連携による発達障害児の社会的自立の支援に関する実践研究―大学‐家庭・地域をつなぐ参加型アクション・リサーチ―」
研究番号 28‐805　　研究代表者：中内麻美　研究協力者：渡邉孝継，竹森亜美
助成額：370,000 円　研究助成期間：2016 年 4 月～2017 年 2 月

■渡邉孝継

＜研究論文＞（査読あり）

渡邉孝継，須藤邦彦，大石幸二（2016）．自閉症スペクトラム障害児における表情を含む複数の刺激の弁別訓練―条件性弁別の枠組みに基づくポーカーゲームを通して―　人間関係学研究，**21**，3-15.

＜研究助成＞

平成 28 年度 笹川科学研究助成・実践研究部門（公益財団法人日本科学協会）
研究課題「学公連携による発達障害児の社会的自立の支援に関する実践研究―大学‐家庭・地域をつなぐ参加型アクション・リサーチ―」
研究番号 28‐805　　研究代表者：中内麻美　研究協力者：渡邉孝継，竹森亜美
助成額：370,000 円　研究助成期間：2016 年 4 月～2017 年 2 月